

2022年03月13日

## **「カラー革命」はアメリカ帝国主義の切り札**

Global Times (環球時報)

**US wages global color revolutions  
to topple govts for the sake of American control**

**TRUE COLORS OF 'DEMOCRACY'**

**カラー革命は米国が世界を支配する手段  
“民主主義”のほんとうの色**

<https://www.globaltimes.cn/page/202112/1240540.shtml>

**環球時報編集部**

**Published: Dec 02, 2021**

### **はじめに**

民主主義の名のもとに、どれだけの悪が行われてきただろうか。戦争を輸出し、「カラー革命」を引き起こし、暴力的なイデオロギーを煽り、経済的な不安定さを助長する...

こうして米国は、世界中に流血と混乱の痕跡を撒き散らしてきた。

「民主主義のモデル」が輝きを失いつつあるというのに、米国はいまだにいわゆる民主主義サミットを通じて排他的な同盟を組もうとしている。

「アメリカ流の民主主義」の本質を暴くために、環球時報はアメリカの4つの民主主義的覇権主義の罪を暴く記事を連載している。これはその第2弾である。

### **「カラー革命」は火薬を使わない戦争**

2003年のグルジアは「バラ革命」、2004年のウクライナは「オレンジ革命」、2005年のキルギスは「チューリップ革命」、そして2011年のアジア・アフリカは「アラブの春」という具合である。



ソビエト連邦構成共和国の地図



1.ロシア、2.ウクライナ、3.白ロシア（ベラルーシ）、4.ウズベク、5.カザフ、6.グルジア、7.アゼルバイジャン、8.リトアニア、9.モルダビア、10.ラトビア、11.キルギス、12.タジク、13.アルメニア、14.トルクメン、15.エストニア

この数十年、アメリカは「カラー革命」という名の、「火薬を使わない戦争」を世界各地で計画・実行してきた。そうやって「アメリカの価値観」を必死で輸出してきた。

米国は「民主主義」の名の下に直接軍事行動を起こすのではなく、他国の内政に介入して政府を転覆させてきた。それが世界支配を強化するための手段として、より効率的かつ経済的だと判断し、カラー革命を好んで使うようになった。

過去30年間にいくつもの政府が倒された。そのうち、このような「非暴力革命」によって転覆させられた政府が90%以上を占めている。

それより前の冷戦時代、アメリカは64回の秘密裏の政権交代、6回の公然たる政権交代を試みた。（“Covert Regime Change: America's Secret Cold War”, by Lindsey A. O'Rourke による）

しかし、革命が残したものは、平和でも西欧風の民主主義でもなく、対象国の大混乱、破壊、カオスであった。それが今日の世界の不安定の原点である。

## **世界でつづく「カラー革命」という名の惨劇**

20世紀後半から、中央アジア、旧ソ連、東欧諸国をカラー革命が席卷している。これらのカラー革命を掘り下げていくと、その背後には必ずアメリカの黒い手が見えている。

ユーラシアの国々は、米国が反政府感情を煽り、政権交代に躍起になっているカラー革命の最悪のターゲットとなっている。

### **バラ革命**

2003年末、アメリカはグルジアの大統領だったエドゥアルド・シェワルナゼを議会選挙の開票に不正があったとして辞任に追い込んだ。そして親米野党の指導者ミハイル・サーカシビリを大統領に推した。これが "バラ革命" と呼ばれるものである。

### **オレンジ革命**

グルジアに続き、2004年10月にはウクライナでも同様の光景が繰り広げられた。米国がウクライナの選挙で「不正」をでっち上げ、地元の若者を街頭へと押し出し、暴動をあおった。

そしてここでも親米反口の野党指導者ヴィクトル・ユシチェンコを大統領に就任させたのである。この事件は "オレンジ革命" と呼ばれる。

### **チューリップ革命**

2005年3月、アメリカは中央アジアのキルギスの野党を議会選挙の結果に対する抗議に駆り立てた。抗議行動は最終的に暴動へと発展した。

それは“チューリップ革命”と呼ばれ、アスカル・アカエフ大統領が政権を放棄し、逃亡することで幕を閉じた。

2020年10月、ロシアの対外情報局局長セルゲイ・ナリシキンは、米国がモルドバでも「カラー革命」を起こそうと計画していると非難した。ナリシキンは声明で、米国はロシアの近隣諸国の内政に乱暴な干渉を加えてきたと指摘した。

## **アラブの春**

アラブ諸国における「アラブの春」の反乱の背後にも、米国がいた。

反政府デモと暴力の波は、いくつかの国で内戦を引き起こし、そこに住む人々に不安と荒廃をもたらした。

この地域は大きな変化を遂げたが、多くの国はこの運動が与えた大きな打撃からまだ立ち直っていない。

北京師範大学政治・国際関係学院の副院長である Zhang Shengjun 氏は、「カラー革命は、どれもみな米国の世界支配への意志と密接に連携してきた」と語る。

「近年、米国は中国の発展を封じ込めるために、中国に関連する国や地域にもカラー革命の戦術を実施しようとしている」と Zhang 氏は指摘した。